

つちだ
土田遺跡（本発掘調査B）

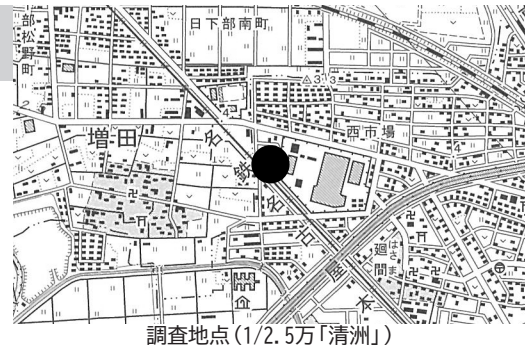
所在地 清須市西市場地内
(北緯35度13分2秒 東経136度49分45秒)

調査理由 名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業の本線工事・仮線工事(側道工事あり)

調査期間 令和7年5月～10月

調査面積 578㎡

担当者 永井宏幸・茶谷 満

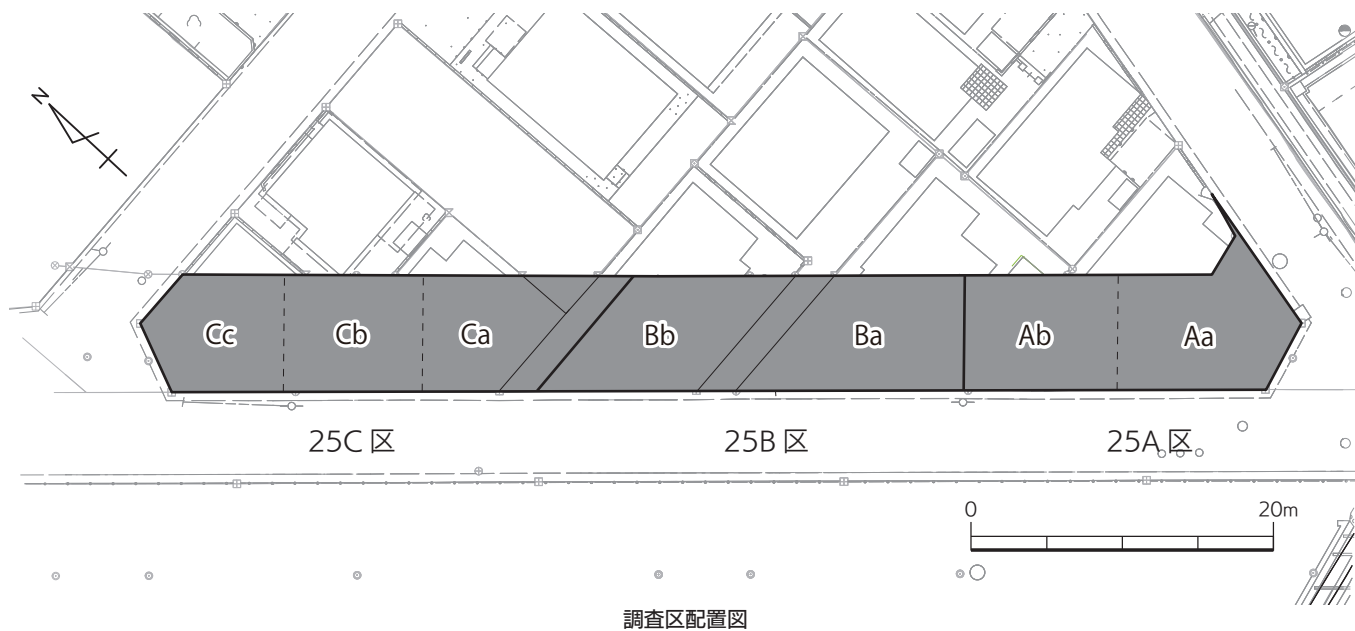


調査の経過 調査は、名鉄新清洲駅付近鉄道高架事業に伴う事前調査として、愛知県建設局道路建設課(尾張建設事務所)より愛知県県民文化局より委託事業を受けて実施した。調査期間は令和7年5月から10月で、調査面積は578㎡である。

立地と環境 調査地は清須市の中央西寄り、稲沢市との境界付近で、名古屋第二環状自動車道と名鉄名古屋本線との交差点から北西におよそ300m離れた箇所である。遺跡は清須市域の東側を南北に流れる五条川右岸の沖積低地に立地する。標高は現況で3m前後である。今回の調査は、令和5年度の廻間遺跡調査区(23A区)の北西に延長した部分であり、周知の埋蔵文化財包蔵地である土田遺跡の北端にあたる。調査地の現況は住宅地であり、隣接する住宅の埋設管や生活導線の関係から、調査区を南東側から25A区、25B区、25C区と設定し、それぞれ2分割ないし3分割で調査を行った。

調査の概要 土田遺跡は主に古墳時代前期初頭を最盛期とする集落遺跡と考えられ、今回の調査区は集落が形成されていた推定範囲の北端に位置する。古代以降、中世では主に耕作地として展開し、畝・井戸等が確認されている。25A区はa区、b区の2分割で調査を行った。a区では近代までの畦畔付近において山茶碗小皿や古瀬戸(仏供)が出土した。古代～中世の面で土坑001SKおよび不明遺構002SXを検出した。b区では古代から中世のピットを数基検出した。また調査区壁面において古墳時代前期の竪穴建物と考えられる痕跡をわずかに検出した。25B区もa区、b区の2分割で調査を行った。a区は古墳時代前期より下層と考えられる湧水のある砂層まで近代以降の水田により攪乱されていたことが判明した。b区では古墳時代前期初頭の竪穴建物跡029SIを検出した。調査区が狭隘なため全体は検出できなかったが、1辺がおよそ4mを測る。029SI内の輪郭に沿って炭化材が出土した。また、029SIの北西寄りでは脚部が欠けた椀形高杯が伏せられた状態で出土した。25C区はa～c区の3分割で調査を行った。a区では中世以降(近世か)以降と考えられる畑の畝立溝を数条検出した。多くは南北方向を主軸とするが、一部直交して東西方向に伸びるものもある。また古墳時代前期に相当する第2面で土坑および溝、第3面で先行する竪穴建物跡(028SI)を検出した。b区もa区と同様に第1面で中世(または近世)以降と考えられる畑の畝立溝を検出した。第2面では中世と考えられる山茶碗を含む溝を検出した。第3面では古墳時代前期に相当する溝、土坑、不明遺構を検出した。遺構内からは古墳時代前期初頭のS字甕、高杯等が出土した。c区では井戸を2基(056SX、058SX)検出した。いずれも素掘りで、深さは検出面から80cm程度であった。下層では古墳時代前期初頭の溝および不明遺構を検出した。また、調査区北端では古墳時代前期初頭頃の落ち込みを確認した。勾配がかなりあり、地形としてこれより北側は深く落ち込んでいくものと考えられる。

(茶谷 満)



Bb区 029SI 検出状況（南西から）



Cb区 047SD 遺物出土状況（西から）



Cb区 053SD 遺物出土状況（西から）



Cc区 056SX 下層確認状況（井戸か）（北東から）